

社会福祉法人尾道さつき会 尾道福祉専門学校
令和4年度 第1回教育課程編成委員会議事録

1. 日時 令和4年9月28日(水) 15:00~16:00

2. 場所 尾道福祉専門学校 オンライン会議

3. 出席者

社会福祉法人泰清会 サンライズマリン瀬戸 施設長 久保田あけみ氏

株式会社ゆず 代表取締役 川原奨二氏

広島国際大学 健康科学部 客員教授 久保田トミ子氏(資料からのご意見)

尾道福祉専門学校 校長 邑岡志保

尾道福祉専門学校 教務主任 金子清美

4. 報告事項

(1) 学生動向について(邑岡)

- ・入学生状況では、2022年度の新卒入学者数は25名、一般生は3名であった。委託生は10名、休学生は2名で、合計で40名となった。休学者の内1名は発達障害と診断を受け福祉サービスを活用していくこととなり8月退学した。
- ・市別入学者で見ると、尾道市11名、三原市6名、福山市19名。
- ・2021年度卒業生23名の就職先状況では、主なところでは介護老人福祉施設7名、居宅サービス7名、介護老人保健施設6名であった。今の2年生には前期、県社協職場合同説明会で尾道福祉専門学校の学生に対して、施設ごとPRを行っていただいた。

(2) 新型コロナウイルス感染対策・web授業について(金子)

- ・前期の全科目15コマの授業形態では、感染症対策のためのオンライン授業を計画的に実施しながら、年度初めに予定していた通りの対面授業、日時を変更しながらの対面授業を行った。前期中の対面授業は8割、オンライン授業は、感染症対策強化のため計画していた時期(ゴールデンウィーク明けと介護実習前)に行った。感染症等による経過閣外のオンライン授業はない。
- ・感染症対策の一環として、昨年度末に203・204教室(隣り合った教室)の間の壁を取り除いて1つの広い教室とし、机の間の距離が保てるようにした。また、昨年度介護実習室の練習用トイレや和室を取り除き、畳を必要時に床に敷いて使用するように変更し、使用面積を広くした。それにより学生間の距離が確保でき、換気も以前よりしやすくなった。
- ・時間割についても、今年度も可能な範囲で午前と午後に1・2年生を分散登校させ、マスクを外して感染リスクが高まる昼食をとらないように調整している。

(3) 行事、カリキュラム・介護実習について(金子)

○行事

- ・前期は、学生が交流できる行事の実施はなかった。後期は、コロナ感染症状況が落ち着けば11/11介護の日に、介護の知見が深められるように交流ができる行事を行う予定である。

○カリキュラム

- ・授業は、進行表通りに進んでいる。

○介護実習

- ・1年生の実習Ⅰ-①において、当初予定していた18施設中、コロナ関連のために受け入れができなくなった施設が3施設あった。他施設でも感染者発生により実習開始が遅れた施設が複数ある。また、実習中に学生が陽性判明し実習が中断したケースが1名あった。このケースでは、実習中の送迎車に職員と学生が同乗した際に十分な換気をしていなかったこともあり、同乗していた職員の感染源となってしまった。尚、実習中に施設経路で学生が感染したケースはない。
- ・2年生は、実習Ⅰ-③・Ⅱを実施。実習修了を最優先に考え、実習可能な期間を延ばすために、本来受ける予定の授業を3グループに分け変則的な時間割として実習期間を確保し、実習を継続させていただいている。
- ・実習Ⅱは、当初予定していた15施設中、コロナ関連のために全く受け入れができなくなった施設が2施設あった。実習中に実習生の妹の陽性判明により、実習生自身の陽性も判明し、実習が中断したケースが1名あった。このケースについては対応が早く、他者への感染は防止できた。また、別ケースでは、実習生の親が弟のクラブ活動の送迎を実施した際、同乗していた弟の友人が後日陽性判明し、送迎していた母親が陽性になったケースがあった。このケースでは、母親の陽性判明前に実習生から報告があったため、急遽実習内容を変更し、利用者に接しないように記録等での情報収集等で対応した。同日中に母親の陽性が判明し、学生自身も濃厚接触者として自宅待機となったが、早期の対応で二次感染防止につながった。尚、実習中に施設経路で学生が感染したケースはない。
- ・現在2名の学生が、感染後の後遺症として強い倦怠感、頭痛、微熱等があり、実習ができない状況となっている。1名は法人内の実習施設であったため、病院受診と内服を継続しながら、一日2時間の変則的な実習をくり返している。
- ・実習を行うに際しては、PCR検査の実施や、学生やその同居家族、よく会う人等の健康観察や行動把握を行い、記録し、実習施設に提出するようにして、細心の注意を行動として行っていくことを再三伝えている。

(4) 実務者研修の実施状況について (金子)

- ・今年度の受講者は15名。(昨年度20名)年齢、住所地、職場の内訳は資料の通り。
- ・感染症対策のためスクーリングの1日をオンラインで実施した。
- ・受講者個人の都合でなかなか課題を進めることができず、学校側から本人に何度も連絡しながらやっと修了もっていくことができたケースや、受講者自身がコロナ感染したためにスクーリングを休む受講者が2名あり、後日補講で対応し、全員が修了した。

5. 意見交換

- ・久保田あけみ氏より、今春就職した学生の退職についての質問あり。デイケアに就職した1名が最近退職し、直後に他高齢者施設に就職した旨報告。他卒業生は継続している。

- ・川原氏より、「発達障害等の顕著な難しさがある場合でも、介護福祉士の養成として1年間は柔軟に連携しながら教育し、進級に際しては、みなし2年生というような立場を作り、退学を回避できる仕組みができないかと思う。授業では、オンラインの割合が多くなり、学生間のコミュニケーションが減っているのではないか、メンタルサポートや授業以外での関わりが必要なのではないかと思う。」と意見あり。

校長より、「学生が接しあう機会が少なくなっていると思う。それに慣れてきている部分もありそうだ。コロナを理由に回避するのをやめて、出来ることはしよう。夏からの第7波で随分と警戒してきたが、減少している時には、行事や本来行ってきた取り組みを実施していきたい。また、最初の久保田氏のお話から、新卒の退学者は可能な限り減らしていきたいと思っており、その取り組みは経営面からしても必要である。」と説明。

- ・川原氏より、「退学を見込んで入学生を確保することは必要であろう。ある大学では2~3割程度退学者が増えているようである。交流が減っていることは要因として大きいと思う。」

久保田あけみ氏より、「コロナ禍であるが、平常にもどすタイミングが施設でも大事である。友人がいるかどうかで頑張れるかどうかは決まる人も多いだろう。ミーティングもなくなればそれに慣れてしまうが、話すことが大事である。」と意見あり。

6. まとめ (校長)

学生とのコミュニケーションの大切さは、個々の学生の変化で実感する。「勉強が分からない」とやっと言えた学生がいた。自分の気持ちを伝えることができれば、一步踏み出すことができる。教員の指導により、やったことが成果として実感できれば小さな成功体験に繋がったようで、その後の実習は大変楽しそうであった。教員の関わりが効果として早期に現れたケースであるが、どの学生に対しても、そこを大切にしておいて関わっていきたくて考えている。

追加の報告であるが、校内の新型コロナウイルスの感染について、2021年2名、2022年8名で大半が家庭内感染だったことを報告する。コロナ禍にあっても状況をみながら後期は行事等を実施していきたいと思う。

以上、貴重なご意見をいただきありがとうございます。